

佐藤 良太 (Ryota SATO)

学位：博士（文学）

略歴：佛教大学大学院文学研究科修士課程修了

佛教大学大学院文学研究科博士課程満期退学（単位取得退学）

専門分野：日本近代文学

研究課題：1. 日本近代文学における〈神〉

2. 日本のサブカルチャーと文学

【著書】

- ・『京都近代文学辞典』（共著、日本近代文学会関西支部、和泉書院、2013年5月）
- ・『兵庫近代文学事典』（共著、日本近代文学会関西支部、和泉書院、2011年10月）

【論文】

- ・「明治期メディアと〈帝国〉— 雑誌『太陽』にみる〈臺灣〉—」（『愛知文教大学教育研究』第12号、2022年2月）
- ・「〈神代文字〉試論 —」（『愛知文教大学論叢』第22巻、2020年1月）
- ・「文学の授業における ICT 活用の有用性 — 可視的文学授業の利点」（『愛知文教大学教育研究』第9号、2019年3月）
- ・「泉鏡花『外科室』」（『愛知文教大学比較文化研究』第15号、2018年11月）
- ・「夏目漱石『夢十夜』— 「第一夜」における〈自己〉」（『愛知文教大学教育研究』第7号、2017年3月）
- ・「夏目漱石『門』— 〈理性〉の境界」（『愛知文教大学論叢』第19巻、2016年11月）
- ・「夏目漱石『吾輩は猫である』— 反転する〈近代〉の教育」（『愛知文教大学教育研究』第6号、2016年3月）
- ・「近現代文学を用いた〈国語科教育法〉の研究 1 — 〈言語活動〉としてみた芥川龍之介『蜜柑』の分析」（『愛知文教大学教育研究』第5号、2015年3月）
- ・「『坊っちゃん』— 〈近代〉へのマニフェスト」（『愛知文教大学比較文化研究』第13号、2014年11月）
- ・「夏目漱石『ころも』— 描かれた〈五倫〉と荀子〈性悪説〉」（『愛知文教大学論叢』第17巻、2014年11月）

【その他】

- ・明治教育雑誌から読む〈学校〉（2023年10月28日、愛知文教大学「学び合う学び研究所」公開講座）
- ・「近代文学における〈怪異〉」（出張講義 於：名古屋市立山田高等学校、2023年3月17日）
- ・「文学から読む病」（愛知文教大学サテライト講座、於：愛知芸術文化センター大リハーサル室、2022年11月18日）

- ・「〈絵画〉で読み解く近代文学 — 夏目漱石と西洋美術 —」 「(出張講義 於：名古屋市立山田高等学校、2022 年 3 月 11 日)
- ・「〈病〉で読む文学 — 漱石作品に描かれた感染症 —」 (小牧市北里市民センター／ゆうゆう・つつじ合同学級、2022 年 2 月 18 日)
- ・「〈病〉で読む近代文学 — 夏目漱石と〈感染症〉」 (出張講義、於：愛知県立小牧高等学校、2020 年 11 月 11 日)
- ・「〈病〉で読む近代文学 — 夏目漱石と〈感染症〉」 (オンライン出張講義、於：上田学園私立上田西高等学校、2020 年 11 月 10 日)
- ・「〈病〉で読む近代文学 — 夏目漱石と〈感染症〉」 (オンライン出張講義、於：長野県立上田東高等学校、2020 年 11 月 3 日)
- ・「〈病〉で読む近代文学 — 夏目漱石と〈感染症〉」 (オンライン出張講義、於：三重県私立暁高等学校、2020 年 9 月 23 日)
- ・「漱石生誕 150 年 夏目漱石〈国民的作家の相貌〉」 (佛教大学四条センター講座、2017 年 11 月 15 日)
- ・「〈京都〉に学ぶということ — 佛教大学 25 年 — (学科講演 第 8 回佛教大学ホームカミングデー、2017 年 11 月 5 日)
- ・シンポジウム「漱石文芸とキリスト教」 — 『門』をめぐって (日本キリスト教文学会関西支部、2017 年 1 月)
- ・「漱石作品〈その死後の生〉」 (京都漱石の會 司会、2016 年 11 月)
- ・「没後 100 年 夏目漱石と〈近代〉明治 — 日本人へのメッセージ」 (岩倉市生涯学習講座 2016 年 5 月～7 月)
- ・「漱石の使った日本語」、「漱石・鴎外のラブレター」 (小牧市民講座 2014 年 7 月 31 日)
- ・阪神近代文学会『阪神近代文学』 (2015 年 7 月～至現在)
- ・日本キリスト教文学会関西支部 (2014 年 7 月～至現在)
- ・佛教大学国語国文学会 (2003 年 4 月～至現在)

令和 6（2024）年度ティーチングポートフォリオ

氏 名	佐藤良太	職位／役職	准教授
-----	------	-------	-----

1. 教育の理念

本学における教養教育の学修基盤である「ことば」と「多文化共生」、人文学の領野で「特定分野に限定されない広い教養と視野」に立った「日本文化」理解を、日本近現代文学の側面から明らかにする。「ことば」とは即ち「文化」そのものと言っても過言ではない。そうした「ことば」の集積体としての〈文学〉を学ぶということは、日本におけるそれぞれの時代に生きた人々の〈心性〉を学び、〈時代〉のものの見方や考え方を知ることにつながる。〈多文化共生〉は、まず〈自文化〉を知ることから始まり、〈自文化〉への深い見識は、〈異文化〉を理解するための基礎となる。「近現代の日本」というあり方を、文学作品・評論・随筆・新聞雑誌といったメディア等、共時的で多角的な文字列から学ぶことは、グローバル社会において、〈自己〉を知り〈他者〉を理解するという点で極めて重要である。〈多文化共生〉において最も重要な〈自文化〉の理解を、日本の近現代文学の領野から把握するため、本学の教育活動においては、以下の3点を重視している。「1.主観的感想と客観的根拠の区別」「2.問題提起から仮説に至る論理的シーケンスの理解」「3.〈仮説〉を論理的に帰納しうる一次資料の明示」、この3点を押さえることにより、自ずと〈テキスト〉〈コンテクスト〉両面への目配りがなされ、もって、〈自文化〉における時代の文字列に向き合い、大学生らしい論理的な考察に至るよう指導している。

2. 教育活動の内容

〈担当科目〉

- ・日本近現代文学演習 A/B ・文章表現法 A/B ・日本近現代文学史 ・アカデミアゼミ A/B/C/D
- ・映像で知る日本近現代文学 ・日本近現代文学に描かれた社会 ・信長学
- ・新聞雑誌から読む日本の近現代文学 ・日本のサブカルチャーA/B
- ・日本近代文学研究〔院〕 ・日本現代文学研究〔院〕
- ・ことばと人文学〔複数教員〕 ・ことばと多文化教育〔複数教員〕

〈部活動顧問〉

軽音楽部（2021年5月～現在に至る） ボードゲーム部（2024年5月～現在に至る）

〈論著〉

「明治期メディアと〈帝國〉—雑誌『太陽』にみる〈臺灣〉」（『教育研究』第12号 2022年2月）

〈公開講座〉

- ①愛知文教大学「学び合う学び研究所」明治教育雑誌から読む〈学校〉（2023年10月28日）
- ②名古屋市立山田高等学校体験授業（文学）「近代文学における〈怪異〉」（2023年3月17日）
- ③愛知文教大学サテライト講座「〈病〉で読む文学」（2022年11月18日）
- ④名古屋市立山田高等学校体験授業「絵画で読み解く近代文学」（2022年3月17日）
- ⑤小牧市北里市民センターゆうゆう・つつじ合同学級（2022年2月18日）

3. 教育の方法

本学の教育活動において現在、大きく分けて「文章系」「講読・研究系」「演習系」の科目を担当している。「文章系」では「文章表現法 A/B」、「講読・研究系」では「映像で知る日本近現代文学」「日本近現代文学に描かれた社会」「新聞雑誌から読む日本近現代文学」「日本のサブカルチャーA/B」、「演習系」では「日本近現代文学演習 A/B」「アカデミアゼミ A/B/C/D」である。人文学の領野で、まず1年次生を対象とした「文章表現法 A/B」において、文章表現上の一般的なきまり、悪文を書かないための7原則、段落の意識といった、大学におけるアカデミック・ライティングの基礎を学び、その実践として教材文を読み400字論評で採点返却し、もって学術的な表記における理論と実践を行っている。そうした「主観的感想と客観的根拠」の区別を、1年次の段階で理解してもらった上で、2～3年次の講読系科目につながるような教育課程を設定している。講読系科目である「映像で知る日本の近現代文学」「日本近現代文学に描かれた社会」「新聞雑誌から読む日本の近現代文学」においては、スライド・紙媒体資料・映像等視聴覚教材を駆使し、主要な近現代文学作品により多く触れつつ、単なる「作品の感想」から「作品と時代」、「時代の文字列とメディア」と、段階的に作品の理解と資料講読能力の向上を企図している。講読系講義は、テーマに沿った課題を提出し採点返却することで評価。採点状況は学習管理システム(G-Classroom)で一週間以内に公開し、「課題得点率〇〇%」というように、自身の得点状況を確認するよう周知している。「演習系」講義である「日本近現代文学演習 A/B」並びに「アカデミアゼミ A/B/C/D」は、3～4年次生を主たる対象とし、それまでに培った日本の近現代文学に裁断する知識と方法でアプローチしつつ、任意の作品をもって自身の研究発表を行い、受講生間の討議で問題を深めながら、発表者の「発表力」と、フロアの「質問力」で評価。採点のフィードバックは、学習管理システム(G-Classroom)に統合し、随時参照しながら、学生自身の「主体的な学び」への取り組みをバックアップできるようにしている。またアカデミアゼミにおいては、限定的にオンライン指導(Zoom)を採り入れ、よりきめ細かい指導を心がけている。

4. 教育活動の成果・評価と改善方策

セメスター毎に実施している「授業評価アンケート」において、「文章系」「講読・研究系」「演習系」それぞれの科目で最も高評価を得ている項目は、「教材の工夫」「新しい知識・能力」「提出物対応」「満足度」である。5段階評価で概ね4.5以上となっている。好評の理由として、「スライド」「紙媒体資料」「映像」を組み合わせ、限られた時間内で視覚的にポイントを明示していることが挙げられる。担当科目における共通の改善点としては「事前事後学習」で、全体的に1～2時間以内に留まっており、今後「主体的な学び」を自律的に行えるよう、時間外学習の点でさらなる工夫が必要である。現在も実施している効果のあった改善策としては、課題の「一週間以内の採点返却」である。学習管理システムで受講生が随時自身の得点状況を確認できるよう設定しているため、講義内課題と平常点を可視化し、より積極的な学びに寄与していると考えている。また、シラバスに明記している「成績評価の方法と基準」を講義冒頭で毎回周知し、「課題提出とその得点」が「最終評価」に反映される点を繰り返し強調しているため、受講生自身の積極性を喚起していると考えている。実際「毎回の得点を見るのが楽しみでした」「自分の課題得点を確認できよかった」等の声もある。今後も、教員と教室の双方向性は確保しつつ、受講生自身のより主体的な学びに資するよう努めていきたい。

5. 今後の目標

「4」の項目でも言及したように、「教材の工夫」「新しい知識・技能」「提出物対応」で高評価を得ており、担当授業における高い「満足度」につながっている点は、今後も引き続きブラッシュアップし、さらなる充実を目指したい。また、「デジタル・ネイティブ」とも呼称される世代の学生であることを勘案し、演習系講義のブレインストーミング等で、生成 AI を適切に使用できるよう研修を重ねながら、教員・学生ともに、高度な情報リテラシーを獲得できるよう今後の授業に組み込んでいく。また「文章表現系」「講読・研究系」科目においても、時間的制約はあるものの、オンラインの質問時間を試験的に設け、画面共有を用いつつ授業における興味関心の底上げ、不明点への対応、課題の書き方の周知、授業への要望等、受講生がより積極的に主体的な学習に向かうよう努める所存である。